20　『玉機微義』における薬物の使われ方

○原田俊介・小曽戸洋・真柳　誠

『玉機微義』は明初の洪武二十一年（一三八八）に劉純が著した全五十巻から成る医方集である。この書は以後の中国・朝鮮・日本の伝統医学に大きな影響を与えた。すなわち中国では明清代におよそ一〇回にわたり翻刻され、朝鮮では銅活字本が組まれ、日本では慶長十年（一六〇五）に早くも古活字版が出、寛永五年（一六二八）にも古活字版、そして寛文四年（一六六四）にはその覆刻整版が開彫された。本書はわが国後世方派の開祖である曲直瀬道三が最もよく研究した書で、その手校本が現存し、『啓迪集』においては『医学正伝』と並ぶ高引用率を示している。曲直瀬玄朔が慶長十年版の識語に「玉機微義者先師一溪翁所最重之書也」と述べるゆえんである。

演者らは現代日中伝統医学における薬物運用の歴史的背景を、今後具体的な手法によって明らかにしていきたいと考えているが、今回『玉機微義』（『和刻漢籍医書集成』所収寛文四年版）を試料に採り、その内容を分析してみることとした。同書は前代、とりわけ宋金元医方（明医方を交えない）の集約であり、前述のごとく日本の後世方医学の基盤をなす書で、しかも依拠するところの医籍（引用文献）を明記するという他にみられない特点を兼備しているからである。明初における医方、そして日本後世方の始点を調査するうえでこれほど良好なサンプルはないであろう。

まず『玉機微義』の構成要素を示すものとして、引用率の高い書から挙げれば次のようである。①『和剤局方』（一二一）、②『三因方』（一一八）、③李東垣の書（一一四）、④張仲景の書（八六）、⑤朱丹渓の書（八二）、⑥『厳氏済生方』（七五）、⑦劉完素の書（七〇）、⑧『黄帝内経』（六六）、⑨王好古の書（六六）、⑩『小児薬証直訣』（四八）、⑪張子和の書（四六）、⑫『衛生宝鑑』（四五）、⑬「機要（不詳）」（四五）、⑭張元素の書（三三）、⑮『脈経』（三二）、⑯『本事方』（二六）、⑰陳自明の書（二四）、⑱『千金方』

（二一）、以下略。これらは医論も含む引用文献で、『玉機微義』が宋～元の医書を中心に成り立っていることがわかる。

次に『玉機微義』所載の総計一二〇三処方がいかなる生薬より構成され、いかなる医方書に由来するかを解析した。処方を構成する生薬を頻用回数の多い順から挙げれば次のようである。①甘草類（四八一）、②当帰類（二四六）、③朮類（二二七）、④附子烏頭類（二一三）、④茯苓類（二一〇）、⑤人参（二〇四）、⑥半夏類（一八五）、⑦桂枝類（一八四）、⑧芍薬類（一八三）、⑨陳皮類（一八〇）、⑩薑類（一六六）、⑪黄芩（一五七）、⑫地黄類（一四七）、⑬川芎類（一三八）、⑭木香類（一三一）、⑮防風（一三〇）、⑯大黄（一一六）、⑰黄耆類（一一三）、⑱黄連類、⑲柴胡類（一一〇）、⑳羌活（一〇一）、㉑升麻（一〇〇）、以下、青皮、厚朴、麻黄、麝香、細辛、枳殼、丁香、桔梗、檳榔、杏仁、黄柏、枳実、天南星、沢瀉、白芷、知母、麦門冬、荊芥、石膏、硃砂、巴豆、五味子、乳香、牽牛、葛根、明礬、乾蝎、連翹、茴香、桑白皮、三稜、呉茱萸、軽粉、神麯、独活、滑石、桃仁、砂仁、天麻など（三〇以上）と続く。これらは張仲景の古方の基本線はある程度引継ぐものの、古方には用いられることのない生薬も少なからずあり、唐以降、ことに宋～元の生薬使用傾向の特徴が如実に反映されている。また、たとえば桂枝類には桂枝・桂・桂心・肉桂・官桂・中桂、甘草には炙・生・熱・屑、当帰には身・尾・梢・川当帰、茯苓には白・赤・茯神、芍薬には白・赤などの別があり、これらの出典を調査することにより、生薬の部位・修治・属・産地などの選別による薬材学の由来、展開過程を知ることができる。

上記の分析データはすでにパソコンに入力・処理済であり、詳細についてはいずれ論文発表に及びたい。

（北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部）